

Title	テオドール・フルルノワ著『インドから火星へ： 異言をとまなう夢遊病の一症例に関する研究』(1)(翻訳)
Sub Title	Théodore Flournoy, Des Indes à la planète Mars. Étude sur un cas de somnambulisme avec glossolalie, (1), (traduction)
Author	Flournoy, Théodore(Ono, Aya) 小野, 文
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.54 (2012. 3) ,p.73- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20120330-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テオドール・フルルノワ著
『インドから火星へ——異言をともなう夢遊病の
一症例に関する研究』（1）（翻訳）

小 野 文

第一章 序論および事のあらまし

1894年の12月、私はコレージュ・ド・ジュネーヴの教授オーギュスト・ルメートル氏から、霊媒の交霊会に出席するよう彼の自宅に招かれた。この霊媒はそれを本職にしているわけではなく報酬を取らないのだが、その驚異的な素質と、見るところ超自然に属する能力については、様々な方面から称賛の声が私のところにも届いていた。もちろんのこと、このような僥倖を逃すわけにはいかないと、言われた日に私は敬愛する同僚の家に出向いたのである。

問題の霊媒をここではエレヌ・スミス嬢と呼ぶことにするが、彼女は三十代の背が高く美しい人で、自然な顔色をしており、髪と瞳の色はほとんど黒だった。その知的で開かれた顔つきと、深いけれども神がかったところはまるでない眼差しは、すぐさま親しみを呼び起こすものだった。よく人が古代の巫女に与えがちな、やつれて悲劇的な様子は全くなく、健康で、身体的にも精神的にも丈夫そうな様子は、見るに心地よいものであったが、これは良い霊媒には決して稀なことではないのである。

全員が揃ったところで、私たちは輪になって座り、交霊会ではお決まりの円卓の上に手を置いた。程なくして、視覚・聴覚・ラップ¹⁾の三つの霊媒能

1) [以下の脚注はすべて原注] ラップ：叩音による交信。

力を持つスミス嬢は、部屋の適度な薄明りの中、彼女の目前に現れ出る様々な幻を、最も自然な仕方でも描写し始めた。時おり彼女は、聴き取りのために描写を中断した。幻視を補いその意味を正確にするために、幾つかの名が響き、彼女がそれを驚きをもって私たちに繰り返したり、またテーブルのラップ音で簡潔な指示が綴られたりしたのである。私に関することのみ言うとなれば（というのもこの晩の栄誉に与れたのは、私を含め三人だったので）、スミス嬢が私の頭上の何もない空間に次々と見る光景の中に、私の生前に起こった家族内の出来事を知らされ、少なからず驚いた。初めて会ったこの霊媒に、現在の世代が絶対知らないような、私的な事柄に属する古い出来事が、一体どこから知れたものか？ 訪れる人の潜在的記憶を、開いた本を読むように読める天才的な直観を持っているという、ボストンの著名な霊媒パイパー夫人の評判の偉業が私の記憶に蘇った。そして私は再び湧いてきた期待を胸に、この会を去ったのである。その期待とは、あまりにも頻繁に失望に終わるもので、子供っぽい好奇心の名残、驚異現象への魅惑の名残であるが、ついに「超自然」を、しかも本物で真正のもの、すなわちテレパシー、透視、霊の出現、そのほかそれが日常の閾を越えており、出来上がった科学の枠組を飛び越えさせてくれるものであれば何でも良いのだが、それを目の前にしているのではないかという期待である。

スミス嬢の過去については、この時期私は簡単な情報しか手にしていなかったが、それは全く問題のないもので、後に得た情報もそれを裏付けるものだった。

慎ましい境遇と申し分ない道徳観の中に育った彼女は、ある商店に雇われてまっとうに暮らしを立てており、そこでは彼女の仕事ぶりや忍耐強さ、才能が評価されて、最も重要な任務の一つをまかされていた。三年前に交霊術に触れ、友人に導かれてテーブルを交信に用いるこじんまりとしたサークルに入ったのだが、そこで周りにはほとんどすぐにも彼女の素晴らしい「超心理学的」能力に気がついた。それからというもの、彼女は様々な交霊術の集まりに通うようになった。彼女の霊媒能力は最初から、先ほど私が描写したような複合タイプのものだった。すなわち覚醒時の幻視に、ラップ音

による綴りと幻聴が伴うのである。内容の点から見ると、交信メッセージの大部分は過去の出来事についてであり、ふつうは出席者のあずかり知らないことだったが、それが事実であったことは常に歴史事典や関係する家族の言い伝えによって確かめられた。こうした過去の認知や記憶の増進という現象に加えて、時には交霊会や周囲の状況に応じて、出席者に向けて道徳的な勧めが、しばしば散文よりも韻文でテーブルに綴られることがあったり、概ね適切な処方箋を伴う診察が行われたり、最近亡くなった家族や友人との交信や、出席者の過去（つまり前世ということだが）についての刺激的であると同時に確かめられない事実が明るみに出されたりもした。最後のものに関しては、出席者の大多数が筋金入りの交霊術信奉者であるにもかかわらず、自分たちがコリニーやヴェルニヨ、ランバル王女、そのほか歴史上の人物の生まれ変わりだと知らされて、ほとんど驚くほかなかった。

こうしたメッセージは多かれ少なかれ、霊媒の導き手かつ守護者と自認する、レオポールと名乗る神秘的な霊の存在に結びついていたようだと言え加えておく必要がある。

程なくしてエレーヌ・スミスとはより深く知り合うこととなった。彼女は私の家で交霊会を開くようにしてくれた。会はルメートル氏の家、そして幾つかの家庭、とりわけジュネーヴ心理研究〔交霊術〕協会の副会長クアンデ教授の家と、ほぼ定期的に交代しながら開かれた。こうした様々な場所は、ばらばらで排除的なグループから成っている訳では全くなく、グループのメンバーはしばしばお互いにそれぞれの会に誘い合っていた。このような訳で、私はこの5年のあいだ、エレーヌの交霊会の大部分に出席することができたのである。私がそこで集めた個人的観察、私が欠席した集会に関してそれを補完するためルメートル氏とクアンデ氏が好意から寄せてくれたノート、それらがこの後に続く研究の主な土台となっている。加えてスミス嬢の手紙と、とりわけ私が彼女と交わした数多くの非常に興味深い会話がある。こうした会話は、交霊会の前後や、彼女の家を訪問したときに為されたもので、家では彼女の母親とおしゃべりすることもできた。最後に、要所要所で引用する

ことになる様々な資料や情報があるが、それらは幾つかの不明点を部分的に解明してくれた。しかしこれら全ての情報源を持ってしても、エレースの霊媒能力を作り上げている複雑な現象を満足のいくやり方で解明するには程遠かった。現象の絡み合いは複雑で、その原因は彼女の過去のあまりにも深いところに隠されており、その解釈も非常に微妙なものだったので、私はしばしば、覚えたラテン語や心理学を忘れたような、つまり無駄骨を折ったような気持ちになった。というのは、これから見ていくが、言葉の面から見れば、この一件で問題となったのはラテン語ではないからだ。

私がスミス嬢と知り合った時期、すなわち 1894–1895 年の冬から、彼女の交霊伝達力の多くは、形の上でも内容の上でも、先ほど私が示した特徴を持っていた。しかしながら彼女の霊媒能力は二つの重要な変化を見せた。

1. まず心理学的形式の見地から。知り合った当初、彼女は覚醒時のある程度の会話と両立しうる部分的な自動症——幻視、幻聴、ラップ音——しか見せておらず、記憶力の顕著な悪化とは連動していなかったのだが、この時期から次第に頻繁に意識を完全に喪失し、そこから回復したときには、会の最中に起こったことを全く思い出せない状態になっていった。生理学的な用語で言えば、この時点までは彼女は記憶喪失を伴わない半夢遊病の状態にあり、出席者も普段の覚醒時と変わらないと認めていたのだが、それが相次ぐ記憶喪失を伴った完全な夢遊病へと変化した。交霊術のことばで言えば、スミス嬢は全くのトランス状態に入った訳で、また幻視・幻聴ができる単なる霊媒から、霊の乗り移りをする、より上位クラスの霊媒へと変化したのだった。

この変化は、大部分が私に起因するのではないかと危惧している。というのも、私が交霊会に参加するようになってからすぐにこれが起こったからである。あるいは少なくとも、夢遊病が体質的傾向や類催眠状態のすぐに広がる傾向のせいで最終的には進行することになっているにしても、私の出席と私がエレースにした小さな実験がそれを引き起こし、その出現を早めるのに貢献したのだろう。

実際よく知られているように、霊媒というものは、彼らを近寄りがたくしている神聖な光輝に大抵は包まれている。彼らが聖職を果たしている思慮深いサークルの中では誰一人として、彼らの肌を触ったり、とりわけ針でついたりするのはもちろんのこと、手を触ったりつまんだりして感覚や運動機能確かめてみるようなことは考えもしないだろう。静寂と不動が、現象の自然な流れを乱さないためにぜひとも必要なのである。せいぜい許されるのは、メッセージが得られた際に幾つかの質問や指摘を行うぐらいのもので、まして霊媒に実験をしてみようという気を起こす人はいない。スミス嬢はこのような慇懃な配慮につねに囲まれていた。私が参加した会の最初の三回まで、私は他の出席者の受動的で専ら観察的な態度に正しく倣い、わりあいうまくじっと静かにしていた。しかし四回目の集会の時に、私の節度も限界に達した。私はこの魅力的な靈感者の身体的状態を確かめたい気持ちが我慢できず、私の目の前に優雅にテーブルに広げて置かれた彼女の両手の上に幾つかの全く初歩的な実験を試みた。この試みは、次の例会（1895年2月3日）の時も再び続けられたのだが、結果として分かったのは、スミス嬢が幻視をしている間、感覚性と運動性のあらゆる種類の障害が見られるということで、これはそれまで出席者には見過ごされていたことであり²⁾、またこれらの障害は、より恒常的な形でヒステリー患者に認められるもの、あるいは催眠術の被験者に対して暗示によって一時的に発生させられるものと、完全に一致している。

これは驚くことでもないし、予想できることでもある。しかし私が全く予期していなかったことが起きたのは、この害のない実験を二回目に試みた四日後だった。私は出席していなかったクアンデ氏の家での集会（2月7日）で、スミス嬢は初めて³⁾完全に眠ってしまったのだ。彼女を起こそうとした

2) こうした障害が以前はなかったもので、私が確認する気になるまでは生じたことがなかったとするのなら話は別であるが。

3) 後になってN夫人の交霊会グループに関して与えられた資料から知ったのだが、1892年中、エレーヌは時に幾ばくかの間眠ってしまうことがあった。しかしこうした夢遊病は、その間にテーブルが指示を綴り続けていたとしても、

出席者たちは、拘縮した腕の硬さを見て幾らかたじろいだ。しかしレオポールは、エレーヌが寄りかかっているテーブルによって話しかけながら、出席者を安心させ、この眠りは霊媒にとって有害なものではないと知らせた。様々な挙動と微笑する表情を見せた後、スミス嬢は申し分のない機嫌で目覚め、レオポールが彼女を抱擁して額に残した接吻を、夢の最後の思い出として保持していた。

この日からというもの、エレーヌの夢遊病はお決まりのこととなり、少なくとも幾らかの間でも完全に眠ってしまわないような交霊会は、この四年間では非常に珍しくなった。スミス嬢にとっては、目覚めたときに普段全く何も覚えていない眠りというのは剥奪であって、彼女はかつての集会を懐かしんだ。当時は目覚めている彼女の目前で展開される幻が、いつも新しく思ってもみないスペクタクルを彼女に提供し、それがこうした交霊会の楽しみの一つとなっていたからである。反対に出席者たちにとっては、夢遊病や憑依の光景、そしてカタレプシーや嗜眠、拘縮等々の身体的現象は、非常に有益で注目に値するエレーヌ・スミスの霊媒力の産物に、多種多様さと強い興味を増し加えるものだった。

時として大は小を導く。完全な夢遊病が発生すると同時に、半夢遊病の新しい様態と数え切れないほどのニュアンスが現れた。スミス嬢の霊媒活動の最初の頃から彼女を特徴づけていた三つの種の自動症は、1895年以降、すぐにもそれ以上の能力に乗り越えられて、いまや心的霊媒能力の、いわば主要な様態では全くなくなっているが、こうした心的霊媒能力の興味深い見本を彼女は提供してきたのである。そうした例に関しては、この後の部分で取り上げる機会が幾度もあるだろう。おそらく彼女の能力のレパートリーは、あちらこちらで見受けられるあらゆる種類の自動症やその二次的性質を含んではいない。不可能なことを要求する訳にはいかないのである。しかし、一つの種の自動症しか能力を発揮できない一様式の霊媒に対して、多様態あるいは多様式の霊媒というものがあるが、エレーヌの取るにたらないような、

私たちが1895年以降に居合わせたような光景にまで発展することは決してなく、またその後二年半の間再発することなく早々と止んだようである。

あるいは少なくとも非常にあやしい「身体的」と呼ばれる現象を除いては、彼女はその多様態霊媒のなかで私が出会った最も素晴らしい例であり、確かに非常に高いレベルの理想型を実現している。

2. 私が今指摘したような、メッセージの心理学的形式における変容、言い換えれば豊かで深みを増した発展と似たことが、内容の上でも同じ時期に生まれていた。

エレーヌの毎回の交霊会の大部分を占めていたのは、それぞれが独立して切り離された一回きりの小さな交信で、それはほかの多くの霊媒と何ら変わるころのない能力であったが、それとは別に、当初から彼女には幻を上位レベルで体系化し、より大きな連鎖とする傾向が明らかであった。そのような訳で、出席者たちは何度も、ある種の交信が複数の会を通して続けられたり、何週間もたつてようやく終わったりするのを目にしていた。しかし私がスミス嬢と知りあった頃から、この結合の傾向はより輝きを増すようになった。夢遊病がもたらす複数の長い夢が生み出され、少しずつ発展し、その筋の展開は何ヶ月にも何年にもわたり、今だに続いている。これらは意識下の想像が創る長編小説のようなもので、「続き物語」⁴⁾とよく似ている。無為な時間や、内面の夢想をそれほど邪魔しない日常的な活動の時間において、多くの人びとが自分自身にこうした物語を語っているのだが、そこでは人はしばしば自分を主人公にしている。何回となく繰り返され、続行され、終りがあるのは珍しい、自由気ままな構築物。そこでは想像力は自由に振るまい、日常的現実の平凡でばつとしない身の回りに報復しようとするのである。

スミス嬢は三つ以上の、それぞれ独立した夢遊病的物語を持っている。私が先にちらっと紹介した、類催眠状態のほとんどにおいてレオポールと名乗っている第二の人格の存在を勘定にいれるなら、我々は大きな広がりを持つ四つの意識下の創作を前にしている。それらは何年にもわたって並行して

4) この主題に関しては Learoyd の有益な調査と統計、「続き物語 (The Continued Story)」『アメリカ心理学ジャーナル (American Journal of Psychology)』、t. VII, p. 86 を参照のこと。

進化しており、別々の会の時に、またしばしば同じ会の中でも、不規則に交代で現れるのである。こうした創作は、おそらくエレヌの心の奥底に共通の源を持っていて、時の流れのなかで相互に影響しあったり、ある種の癒着を取り決めることなしには発展しなかっただろう。しかし——仮にここに一つの幹から枝分かれした、あるいは何時の日か総括が完結する（もしそれがすでに未知の意識下層で総括されていないと仮定しての話だが）一つの全体の素描の部分をなんとか見るところまで最終的にいったとしても、——少なくとも現実には、また見かけ上は、こうした想像上の構築物は比較的独立性を呈しており、また別々に研究するに足りる内容の大きな相違を見せている。ここではその外観を述べるにとどめよう。

これらの物語のうち二つは、前世の存在に関する交霊術者の想念につながっている。というのもエレヌ・スミスはこの地上に既に二度生きていたことが分かっているからだ。500年前、彼女はアラビアの族長の娘であり、シマンディニの名で、シヴルカ・ナヤカと呼ばれるインドの王子のお気に入りのお妻だった。この王子はカナラを治め、1401年にはチャンドラガリの要塞を築いたと言われる。また前世紀〔訳注：18世紀〕に彼女は再び、有名かつ不運なマリー＝アントワネットの姿で現れた。罪のつぐない、そしてもっと完全な者になるために、現在はエレヌ・スミスという慎ましやかな境遇に身を置いている彼女は、ある種の夢遊病的状態のときに、かつての自分の栄華な姿を思い出し、一時的にインドの王女になったりフランスの女王になったりするのである。

この二つの前世に関わる無意識の表れの全体を指して、インドあるいは東洋の輪廻と女王の輪廻の名で呼ぼうと思う。

同じように火星の輪廻の名で、第三の物語を呼ぼうと思う。このなかでスミス嬢は、自身の専有物であり現在の生活の慰めでもある霊媒能力のおかげで、火星の人々や物と連絡を取ることができ、また火星の神秘を我々に明らかにしてみせた。特にこの天文に関わる夢遊病において、異言現象、聞いたことのない言語の捏造と使用の現象が見られたのであって、それらはこの研究の中心的対象の一つとなっている。しかしながら似たような事象はインド

の輪廻においても同様に表れていることが明らかになるう。

レオポールの人格に関して言えば、それは先に述べた創作と非常に複雑な関係を持っている。一方でこの人格は女王の輪廻と緊密に結びついている。それというのもこのレオポールという名は仮名でしかなく、実際にはかの高名なカリオストロの隠れ蓑になっているのであり、彼はどうやら気も狂うほど女王マリー＝アントワネットに恋い焦がれたあげくに、今では肉体から放れて時空をさまよっているのだが、探求の果てにスミス嬢のうちに一世紀前の自分の不運な情熱の対象であった女王を再び見出してからは、彼女のいわば守護天使と自らを任じたのである。もう一方で、エレーヌの脇で彼が演じる守護者兼助言者の役のせいで、レオポールは彼女の夢遊病のなかで特別な位置を占めている。彼は多かれ少なかれそうした夢遊病のほとんどに入り込んでいるのだ。彼はその場に居合わせ、夢を監視し、そしておそらくある程度までそれを導いている。そのようなわけで、時にはインドや火星の舞台のただ中に彼が姿を現し、エレーヌの手の特徴的な動きによって言葉を発するのが見受けられるのである。要するに——ある時はテーブルを叩く音や指の軽打、あるいは自動書記のなかに自らを現し、またある時は完全に乗り移って、トランス状態のスミス嬢の口から自分の声で話したりしながら——レオポールは交霊会において、霊媒を扱う仕方としては、よい助言を与えるガイド霊の多種多様な役割を担っているのである。すなわち上演を見守り、いつでも介入する用意のある、舞台裏に隠れた演出家。無言劇や分かりにくい場面に関して説明を与える準備のある、善意の通訳家。厳しい訓戒で出席者に対して容赦なく事実をつきつける検閲官でありモラリスト。すばやい診断と薬物に精通した、思いやりのある医者、等々。これ以外にももちろん、本来のカリオストロとして、蘇ったマリー＝アントワネットの夢遊病的眼差しの前に現れ、幻聴のかたちで彼女と問答をすることもある。これが全てではないし、完全にするにはスミス嬢とこの姿の見えない彼女の保護者との個人的でプライベートな関係をも検討しなければならないだろう。なぜなら彼女はしばしば個人的にレオポールを呼び出し、質問しているからで、時に音信不通になる時が何週間もあるとしても、それ以外の時にはレオポールは声や幻

で答えており、それは覚醒時に何か仕事をしているときの彼女を驚かせるが、彼は代わる代わる彼女が必要としている実際的な助言やモラルに関する助言、有益な注意、励ましや慰めを惜しみなく与えるのである。

エレーヌの半夢遊病的症状が完全な夢遊病に変化したことに、私がかなりの部分関わっていると非難されることがあったとしても、反対にいま話したような意識下の大きな創作の誕生に関しては、以後の発展を除いては、私は全く無実であると思っている。まずレオポールについては、彼の出現は非常に古く、これから見るようにおそらくはスミス嬢が交霊術の手ほどきを受ける以前までに遡る。三つの輪廻に関しては、それが裾野を拓けたのは、確かに私がエレーヌと知り合いになってのち、また彼女が様々なトランス状態に陥るようになってからであり、それはまるでこの自動症の最高の形態が、あれほど複雑な創作の成熟を可能にする唯一の形態、あのような内容に適してふさわしい唯一の心理的容器であるかのようにだった。しかしこれらが最初に現れたのは、三つとも間違いなく私が出席するようになる前のことである。インドの輪廻において、私は図らずも役を与えられているのをこれから見ることになるが、この輪廻は私がスミス嬢の交霊会に出席を認められる八週間前（1894年10月16日）にはっきり始まっている。火星物語は同じ時期に始まっているが、私がこれから示してみせるように、ルメートル氏の意図しない示唆に密接に結びついており、氏は1894年の春にエレーヌと知りあっているので、私より九ヶ月前ということになる。女王の輪廻は、その前の冬から、1893年12月からクアンデ氏の家で持たれていた会において始まっている。しかしながら繰り返して言うが、この意識下の過剰な植生が繁殖し、素晴らしい花を開かせたのは1895年になってからで、それはスミス嬢が交霊会を行っていた様々な場所において受けた、刺激的で挑発的な暗示の影響によるのだが、こうした示唆は全く意図されたものではなく、その時点でも疑いさえかけられないものであった。当然のことながら、このように包括的で限りなく複雑な暗示において、責任をはっきりさせるというのは諦めなければならない。この暗示には、ルメートル氏やクアンデ氏や私自身が、それぞれ自分の性格や気性に従って関与したのはもちろんのこと、それだけでな

く他にも多くの要因が、特に一回または複数回スミス嬢の交流会に臨席した観客——この人たちは様々で数にしてもかなりいる——、またスミス嬢のところに相談にきた人たちが、同じように介入しているからである。

初めてスミス嬢に出会ったときにあんなにも私を驚かせた、私の家族に関する無遠慮な事実の暴露、また彼女の霊媒力があふれるように引き起こし、それにより彼女も交霊の世界では広く有名になっている、無数の同じような超常現象、これらに関しては、この著作の終りのほうで再度触れることにしたい。霊媒によるコミュニケーションがもつ超常的性格の問題は、どのように解決しようと、つねに退屈さと呼び寄せてしまう。というのも人は自分自身と他の全ての人と一緒に満足させることはできないからである。それゆえこの問題は一番最後に解明するというのが賢いやり方だろうし、また同時にこの自動症の内容の起源を探る前に、その心理的發展を検討するというのがよい方法でもあろう。

〈訳者付記〉

上に訳出したのは、Théodore Flournoy, *Des Indes à la planète Mars. Etude sur un cas de somnambulisme avec glossolalie* (テオドール・フルルノワ著、『インドから火星へ——異言をとまなう夢遊病の一症例に関する研究』、初版1900年)の第一章である。当初、副題のほうをタイトルに心理学の研究書として構想されたこの書物は、世紀の変わり目にジュネーヴで活躍した霊媒、エレヌ・スミス嬢をその考察対象としている。心霊主義を扱っているうえに、古代インドの言語サンスクリットや火星語まで飛び出してくる内容をもつため、最終的にはより広い読者層に向け、魅惑的なタイトルを冠されて出版された。

著者テオドール・フルルノワ(1854–1920)はジュネーヴ生まれ。医学と哲学を修め、ジュネーヴ大学の心理学講座の教授を長年勤めた人物である。フルルノワは生前何冊かの研究書を上梓しているが、この『インドから火星

へ』はその中で最も一般に広く知られた著作であり、当時のベストセラーとなった作品である。その理由は幾つか考えられるが、まずは当時人々の関心を集めていた心靈主義をとりあげたこと、またこの著作が、研究書らしい堅い文体を用いず、一人称の普通の言葉で書かれたものであること、そしてフルルノワが意識してミステリー風に、謎を最後までとっておくような書き方をしているためであろう。実際、本の売り上げが上々であった証拠に、後に印税をめぐって著者と研究対象であった霊媒、スミス嬢は対立している。

言語思想史を専門とする訳者から見て、この著作がもつ意義は大きく分けて二つある。一つはフルルノワの同僚であり、また後には親戚（ソシュールの息子はフルルノワの娘婿となる）ともなるフェルディナン・ド・ソシュールがこの著作に登場し、実際に霊媒とも交わりを持っているという点である。ソシュールはサンスクリットの専門家として霊媒スミス嬢が「インドの夢」のなかで語る言葉を分析し、つづいて「火星の夢」のなかの未知の言語も分析対象としている。交霊会に参加するソシュールは、ジュネーヴ大学で「一般言語学講義」を行う前のソシュールであり、特に「言語一般」について問いを深めている時期である。近代言語学の基礎を形作ったこの理論家が、霊媒の言語を真剣に分析した時期があったということ——不可解な寄り道、気まぐれとしか思えないこの交流に、言語学成立の別の側面が読み取れるのではないか。これが訳者の関心を引く点である。もう一つは、無意識の問題圏が言葉（ここでは異言）と持つ深い関係を知らしめるという点である。「異言（グロソラリア）」は、学習したことのない外国語、または意味不明な言語や未知の言語を話す現象を指している。有名なのは新約聖書の記述にある、聖霊降臨（ペンテコステ）を受けたキリストの弟子達が異国の言葉をしゃべりだしたという出来事である。普通、宗教的次元、あるいは心靈主義の次元に属すると考えられるこの現象を、フルルノワは当時の心理学の立場から捉えようとし、またその取り組みはソシュール以外の言語学者の関心をもひいている。そもそもフロイトの創設した精神分析という分野、そしてその技術もまた、広い意味で「ことば」に関わる分野、また技術であった。生まれつつある精神分析と目覚めつつある近代言語学。この二つの交通を考えるうえ

で、フルルノワの著作は欠かすことのできない材料を提供してくれる。

精神分析の側から見ると、この著作はフロイトの『夢判断』と時期を同じくして出版され、「無意識」の存在と働きを告げ知らせる書として、重要である。『無意識の発見』⁵⁾のなかでアンリ・エレンベルガーは次のように述べている。「これは無意識の領域に分け入ったフルルノワの研究のなかでも最も知られたもので、またこれを見れば彼の研究方向が分かる。彼の第一の関心時は、超心理学的過程にからんでいる仮説の不要なものを避けて通ることだった。彼はこれらの現象の多くを辿って忘却されている無意識の記憶(それを指すために、彼は“潜在記憶”(cryptomnésie)なる新語を発明した)にまで遡ることができた」(邦訳上 365 頁)。しかし人間心理の深層における性の欲動を明らかにすることで、『夢判断』が時代を画する著作となることをフロイトがほぼ確信していたのに対し、フルルノワのほうは読者を考慮しつつ性の分野に足を踏み入れるのをためらっているように見える。精神分析史家エリザベト・ルディネスコは、『フランスにおける精神分析の歴史』⁶⁾の中でフルルノワについてこう述べる。「このアヴァンチュールにおいて、二つの要素が注意をひく。一つには、この物語の“道化”が、医者のかどうか若い女性のかどうか、分からなくなるという点。一人は夢遊病的異言の言語を再構築し、もう一人は、宇宙の住人から“啓示を受けた”ものとして、この言語を話し、また書く。二つ目には、この学者の詳細な調査が、医者と解釈者の役割が混ざり合った関係から出発してはたらいっているのが見て取れる。フルルノワは、転移の次元を考慮に入れられなかった古いタイプの催眠療法士なのである。彼は霊媒嬢が彼自身に感じていた愛着の性的な性質を理解しているが、自分の本が彼女や親しい人達に読まれることを知っており、慎み深さからそうした性的な性格を強調していない」(p. 123)。

しかし『インドから火星へ』を読み進めていくうちに、フルルノワが遠慮

5) Henri F. Ellenberger, *The Discovery of the Unconscious*, Basic Books, 1970.
邦訳はアンリ・エレンベルガー著『無意識の発見』、木村敏・中井久夫訳、弘文堂、1980 年。

6) Elisabeth Roudinesco, *Histoire de la psychanalyse en France*, Fayard, 1994.

して述べずにおわることは、全てスミス嬢が露わにしているという気がしてくる。若く美しい（フルルノワ自身の言葉）霊媒嬢エレーヌ・スミスが、前世でフルルノワ教授と夫婦の仲だったと述べるとき、その夢遊病状態のことばのなかに、フルルノワが語らなかったことが全て語られていると言ってもよい。読者が『火星からインドへ』のなかに読む夢の言葉は、「解釈」の必要がないほど明確である。

長い紹介文は謎解きの興味を削いでしまうので止めておくが、一言付け加えるなら、フランスでは2007年に同じ『インドから火星へ（Des Indes à la planète Mars）』というタイトルで映画が制作・公開されている。この著作が100年後も変わらず版を重ね、一部の人々の関心を引きつけているのは事実のようである。フロイトが創始者となって大きな興隆を見せた精神分析、その傍らで、心靈主義の霊媒を通して「ことば」と「無意識」の関係を追い続けた人々がいたことは、この異言を話す霊媒自身の魅力とも相まって、忘れられない探求の物語を作り出しているのだろう。